



最下位という勲章 ～将棋で負け続けること～

会員 伊藤 雅浩 (61 期)

修習生だった2007年のクリスマスに、将棋の盤駒を買った。当時5歳だった息子と暇つぶしをするためだった。当時の推定棋力10級（＝初心者）の私からの手ほどきながら、息子は思いの外のめり込み、やがて私の相手だけでは物足りなくなって近所の教室で修行する毎日となった。私も、将棋が楽しいと感じて勉強を始めてみたが、頭が柔軟な子どもとの差を見せつけられるばかりだった。

数年後、私は将棋を通じて知り合った仲間に誘われて社団戦という団体戦に出ることになった。7人一組のチームを組んで、約半年かけてリーグ戦を戦う。実力別に5段階に分かれているし、最下層の5部リーグだから素人でも大丈夫という誘い文句に乗ったのが間違いだった。将棋の大会に出るのは人生初体験だったが、予想どおり、手合い違い（将棋用語で技量に差がありすぎて勝負にならないこと）で、息を吐くように負け続けた。私が参戦すると聞くと当時3部のチームで闘う息子は、「お父さんは5部でもたぶん一つも勝てない」と言っていた。息子は父の実力をよくわかっていた。

もう一生、勝てないだろうと諦めかけたデビュー7局目、熱戦のまま終盤戦を迎えた。局面は優勢で、千載一遇のチャンスがきた。周りで観戦するチームメイトの視線を感じ、ふと顔を上げると息子が対局者の後ろ側に立ち、観戦していた。

私が顔を上げて息子と目が合うと、わずかに笑ったが、すぐに目をそらして遠くへ行ってしまった。将棋は、周りからの助言は厳禁であり、アイコンタクトなども疑いの元になる。しかし、私はその一瞬で自分の形勢判断が間違っていなかったことを確信し、大いに自信をつけた。そもそも将棋が弱いということは的確な形勢判断ができないので、勝っていると思って客観的には劣勢であるということとはよくあるのだ。そこから先は自信を持って相手玉を寄せきることができて人生初勝利をあげることができた。

その翌年、息子は奨励会というプロ棋士の養成機関に入り、アマチュア大会の参加資格を失ったので、親子で同じ将棋大会に出たのはこの年が最初で最後となった。

私は、初勝利をあげたものの、その後も順調に負け続けた。たまに勝つことはあっても、勝率は3割に届くことはなかった。

そしてさらに数年が経ち、社団戦の会場に着いた私は驚いた。会場には出場選手全員のレーティング表が貼り出されるのだが、私の名前は最下段に載っていた（つまり最下位）。レーティングは対局に勝てば上がるし、負ければ下がる。初参加のときは誰でも1500という初期値が与えられるが、大きく負け越している私は、レーティングが下げ止まらず、とうとう5部リーグ参加者約200名中、最下位になってしまったのだ。

しかし、決して負け惜しみではないが、最下位という結果は一つの勲章だと感じていた。これまでの人生で、さまざまな競争の機会があっても、100人単位の集団で最下位という結果を残したことはない。負けても負けても出続けられない限りは、レーティングは下がらない。くじけなかったからこそ勝ち取った（？）最下位である。

普段の代理人業と違って、将棋は本人の戦いで、事件筋も証拠の優劣もない対等なゲームだ。言い訳は効かないが、勝っても負けても楽しめる。



社団戦の対局のようす